

地方公務員 file

風を起こす

インドネシアの空の下で気づいた
当たり前前のありがたさ

徳島県農林水産総合技術センター畜産研究所研究員

林 宏美さん

当たり前前だと思っていたことが、実は当たり前じゃなかった——
そこに気づけただけで、何気ない日常がぐっと色味を帯びてくる。

徳島県の行政獣医師である林宏美さんは、現職派遣制度を活用し
青年海外協力隊に参加して改めて当たり前前のありがたさを実感した
という。インドネシアのスラウェシ島で家畜の防疫や飼育管理に従
事した日々の中で、何を見て、何を考えたのだろうか？

「ここで飼っている牛は、すべて人間
と同じ名前をつけて血統登録してい
るんですよ。この子はのりこちゃん」そ
う言いながら林宏美さんが頭をなで
ると、牛ののりこちゃんは気持ちよそ
うに目を細めた。

——JR徳島駅から車で三〇分の上
板町にある徳島県農林水産総合技術支
援センター畜産研究所。徳島市街を見
下ろす丘の上の、東京ドームとほぼ同
じ広さの敷地に、牛舎や鶏舎など施設

が建ち並ぶ。

林さんはこの畜産研究所の研究員と
して、現在、肉牛を担当している。血
統五割、エサ三割、管理二割といわれ
る肉牛において、受精卵を酪農家に供
給したり、肉質を高めるための育成方
法について試験研究を行っている。試
験研究と聞くと白衣を着て研究室にこ
もっている印象があるが、牛のお世話
も大切な業務。肉牛だけで三五頭もい
るのだ。

【はやしひろみ】

昭和50年生まれ、徳島県阿南市出身。
北海道にある獣医学系大学卒業後の
平成12年、徳島県に入庁。徳島県鴨
島家畜保健衛生所（現：吉野川家畜
保健衛生所）、徳島保健所を経て、
徳島県農林水産総合技術センター畜
産研究所に配属。平成17年7月、青
年海外協力隊一次隊としてインドネ
シアのスラウェシ島バル県畜産局に
赴任。平成19年7月帰国。以後、畜
産研究所で肉牛を担当している。モ
ットーは「自分に今できることを一生懸命」。





村に入って住民と直接話し合いながら、牛の飼育管理の指導する

牛の獣医師になりたさー！

子どもの頃から動物が大好きだった林さんは、高校卒業後、故郷を離れ北海道の獣医学系大学に進学した。犬・猫に代表される小動物と牛・馬などの大動物について一通り学んだ後、大動物を専攻したのは「北海道の酪農地帯という環境で牛と身近に接するうちに、牛の獣医師になりたいと思うようになったから」。ペットブームを背景に多くの学生が小動物の獣医師を目指す中で、貴重な選択である。

卒業後は故郷での就職を希望し、徳島県に行政獣医師として採用された。最初の配属先は家畜保健衛生所。家畜を伝染病から守る防疫のほか、畜産農家への衛生管理指導に四年間携わった後、徳島保健所に異動。動物の衛生から一変、今度は人間の衛生に関わる食品衛生や環境衛生を受け持った。

退職しても叶えなかった夢

「動物のお医者さん」であるはずの獣医師だが、行政獣医師は基本的に診療を行わない。管理、監督がその任務だ。しかし、林さんは休日を利用し、知り合いの酪農家や師事する大学教授に教えを請いながら、牛の診療技術を学んでいた。

行政獣医師には必要ない診療技術

あえて習得していた理由、それは「獣医師として青年海外協力隊に参加する」という夢があったから。大学の掲示板でポスターを見て以来、「いつかは自分も」という思いを強くしてきたのだ。

「協力隊に魅かれたのは、ボランティア精神というよりも大動物の獣医師として自分の力量を試してみたいという気持ちのほうが強かったんだと思います」

協力隊参加に向けた林さんの準備は、入庁間もない頃から始まっていた。獣医師として派遣されれば当然求められるであろう診療技術のほか、語学として英会話も習得。独立行政法人国際協力機構（JICA）が開催する体験談や説明会にも足を運び、OB・OGの話に熱心に耳を傾けてきた。そうして二九歳の誕生日を機に、ようやく協力隊への応募を周囲に表明した林さんの目の前に大きな壁が立ち上がった。

「家族から猛反対されたんです。それに上司からも…」

全国的な傾向として行政獣医師の数は不足しているが、徳島県も例外ではない。そんな状況でBSEなどの伝染病が発生すれば、たった一人の獣医師が欠けたことが思わぬ影響を及ぼすことがある。上司として二つ返事で承知

できないことは林さんにも十分わかっていたが、「退職してでも行きたい」というほど気持ちは熱くなっていたし、覚悟もできていた。

毎日のように家族や上司と話し合いを重ねる中で林さんの情熱が周囲の心を動かし、ついに「そこまでして行きたいと思っているなら引きとめても仕方ない。むしろ行かないほうが後悔するだろう。行ってきなさい」という言葉をもらうことができた。それまでの仕事に対する評価、積み重ねてきた信頼もあつたのだろう。職場では現職のまま派遣されることが内定した。

予想外の派遣先

青年海外協力隊の募集は年二回、春と秋に行われる。募集分野は農林水産、教育、保健衛生などで職種は二二〇以上。林さんは平成一六年度の秋募集に獣医師として願書を提出し、一次試験、二次試験を経て、協力隊として採用が決まった。派遣先通知が届いたのは翌年三月。そこには意外な派遣先が書かれていた。

——インドネシア

「どうして？」というのが、率直な感想でしたね。協力隊要請先として挙がっていたのはフィリピンや南米の国々が多く、インドネシアは目に留まらなかった…。でも、インドネシアからの要



インドネシアはイスラム教の国。
女性は外を歩くとき、布を頭から
被らなければならない

請理由を見ると、家畜の防疫や飼育管理など私がそれまでやってきたことそのものだったんです」

派遣先が決まりJICAが実施する派遣前三カ月間の訓練を無事修了した平成一七年七月、林さんは家族や友人に見送られ成田空港を飛び立った。

行き詰まる目の前に現れた一筋の光

インドネシアは二万七五〇〇以上の大小の島により構成され、国土の全長は五〇〇kmにも及ぶ。首都ジャカルタでの一週間の研修を経て、林さんが向かった先はスラウエシ島。ジャワ島の北東に位置する、インドネシアで四番目に大きい島で、六つの州に分かれている。その一つ、南スラウエシ州のバル県畜産局に、国の農業省からの派遣という形で赴任した。

現地の第一印象は、「うわぁ、徳島に帰って来たみたいやわ」。その理由は、「山と田んぼがあって海が近いという自然環境で、故郷の雰囲気にとってもよく似ていたから」。

人々の気質はというと、世話好きで、何でもよくしゃべって、感情表現が豊か。最初は驚いたストレートな物言いも、インドネシア語初心者的林さんにとっては、言葉をオブラートに包まない分、逆にありがたかった。

バル県では肉牛三万三〇〇〇頭が飼育されているが、畜産局には獣医師がたった一人しかいない。これでは、家畜飼育産業の育成はおろか、衛生管理も疾病予防もままならないのは当然だ。

さらに、林さんを驚かせたのが、畜産局職員の仕事に対する姿勢。出退勤の時間は個人の自由で、県事務所にいてもお菓子を食べてダラダラしゃべっていることが多い。公務員の副業が認められていて、副業を優先させたとしても「給料が少ないから仕方ない」と悪びれた様子もない。そんな環境の中だと、せわしなく働くことのほうがむしろ奇異に映るのかもしれないが、林さんには二年間という限られた時間の中で果たすべき責務がある。

「赴任して半年経った頃、このままでは私がここに来た意味がないと思って、まず、県事務所に毎日行くのを止めました。その代わりに、月の半分は村に入って実践型で飼育や衛生管理の指導をすることにしたんです」

単身での派遣で、前任者もいない。一から十まですべて自分で決めていくしかないのだ。

このとき、図らずもハッと気づかされたことがある。

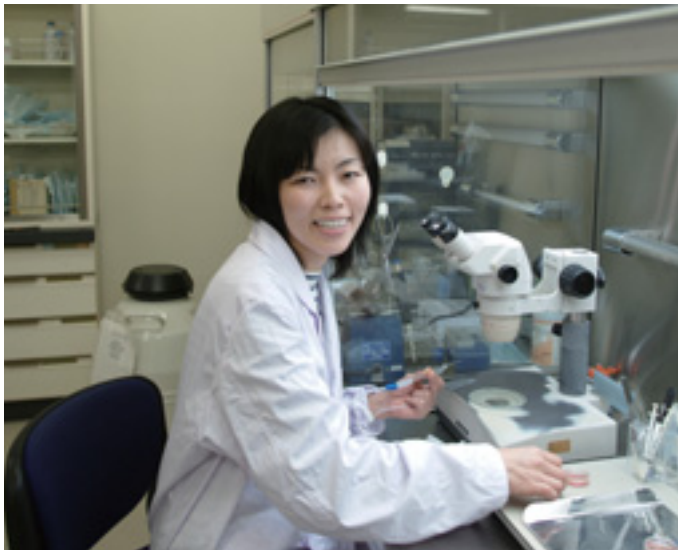
「日本では、座っているだけで仕事ができるようなシステムになっていたんだ」

役所という組織の中では、各自に役割が与えられ、それをこなすことにより仕事が進んでいく。「菌車の一つ」であることはマイナスに捉えられがちだが、プラスに捉えればそれが組織という大きな力を動かしているのだ。

しかし、ここでは自分が動かなければ何も始まらない。同時に、現地の人を巻き込まないと一人では動けない。だからこそ、カウンターパート、つまり現地での活動をサポートしてくれる良き同僚に出会えるかどうかが大きな鍵を握る。理想と現実の狭間で行き詰まる林さんの前に、一筋の光となる人物が現れた。村の農業グループを取りまとめる若きリーダー、アクサン氏だ。

「彼は何事にも前向きな人で、貧しいなりにとても一生懸命やっています。農業研修員として来日したことがあり、そのとき見た日本の農業にすごく感動した、村の農業も良くしていきたいと言って本当によく動いてくれたんです」

右腕となるカウンターパートを得て、林さんの活動にもエンジンがかかった。「今、この村に一番必要なものは牛のエサ」と判断を下し、牧草の栽培に乗り出す。日本では牧草を輸入していたため栽培の経験はなかったが、メールで日本の恩師に教えるを請いながら、乾季でも育つ牧草の栽培に取り組んだ。手



徳島県の畜産を発展させることが使命。受精卵業務もその一つ

探り状態から始めて試行錯誤の末、青々とした牧草が実ったときには、近隣の村を挙げてのお祭り騒ぎになった。

「あとは、それを継続できるかどうか。でも、そこまで見届けることはできませんでした」

仕事楽しくて仕方がない！

協力隊としての任期を満了し、帰国した林さんはすぐに職場復帰。そこで、二年前と明らかに違う自分を感じることになる。仕事を心の底から楽しいと思えるようになっていたのだ。

協力隊で活動していたとき、獣医師として自分の力不足を痛感させられる場面が何度もあった。「日本であるときもつと突き詰めてやっておけば、ここで役に立ったのに…」その気持ちだが、帰国後の仕事に対する熱意となった。

「二年前ならここまでで止めていたことも、もつと掘り下げてやりたい、やってみたいと思うようになってみんです。牛の世話をするにしても、日本の牛と比べてインドネシアの牛はどうしてあんなに貧弱だったんだらうとか、あの牛を元気にするには何か良い方法が

あるのではないかと考えていると、一回一回のエサやりも単なる作業ではなく、すごく貴重な時間に思えてきました。

何事もやればやるだけの価値はある。どんなことでも無駄にはならないと気づいたのです」

以前は当たり前過ぎて気づかなかつた何気ない日常の中にも、たくさんの発見があった。日本の素晴らしさも再認識できた。

「協力隊に参加して違った視点を持つてるようになったおかげで、同じことでも感じ方が変わったのです」

海外のニュースが遠い国のニュースではなくなり、世界の貧困も地球温暖化もイスラム教徒の考え方も、自分に関わりのあることとして捉えられるようになった。

次は別の形で…

帰国して半年が過ぎ、以前にも増して意欲的に仕事に取り組み林さんだが、機会があればまた協力隊に参加したいのだろうか？

「熱い気持ちで参加しましたが、正直、二年間の任期が限度だったと思います。水も食べ物も考え方も全く異なる環境の中での生活は、想像以上に過酷でした。お風呂のない村で冷たい川の水を浴びながら、日本の熱いシャワーをど



林さんの赴任により、それまでつながりのなかった近隣の村同士に交流が生まれた

れほど恋しく思ったか。四六時中、人の視線にさらされる生活がどれほど強いストレスになったか…。

協力隊として私が本当に役立てたかどうか、はつきりとはわかりませんが、しかし、参加したことで得られたものの大きさは計り知れない。周囲の理解のおかげで、協力隊に参加できたこと、帰国後に復帰できる職場があったことに、心から感謝しています。

いつになるかわかりませんが、次は協力隊としてではなく、もつと経験を積んだ「シニア海外ボランティア」などで参加したいですね」

「自分に今できることを一生懸命」をモットーに、自らの人生に果敢に挑み続ける林さん。日暮れ時。牛舎へと牛を追うその横顔が、夕陽を受けて輝いた。

(取材／ライター・しのだりょうこ)